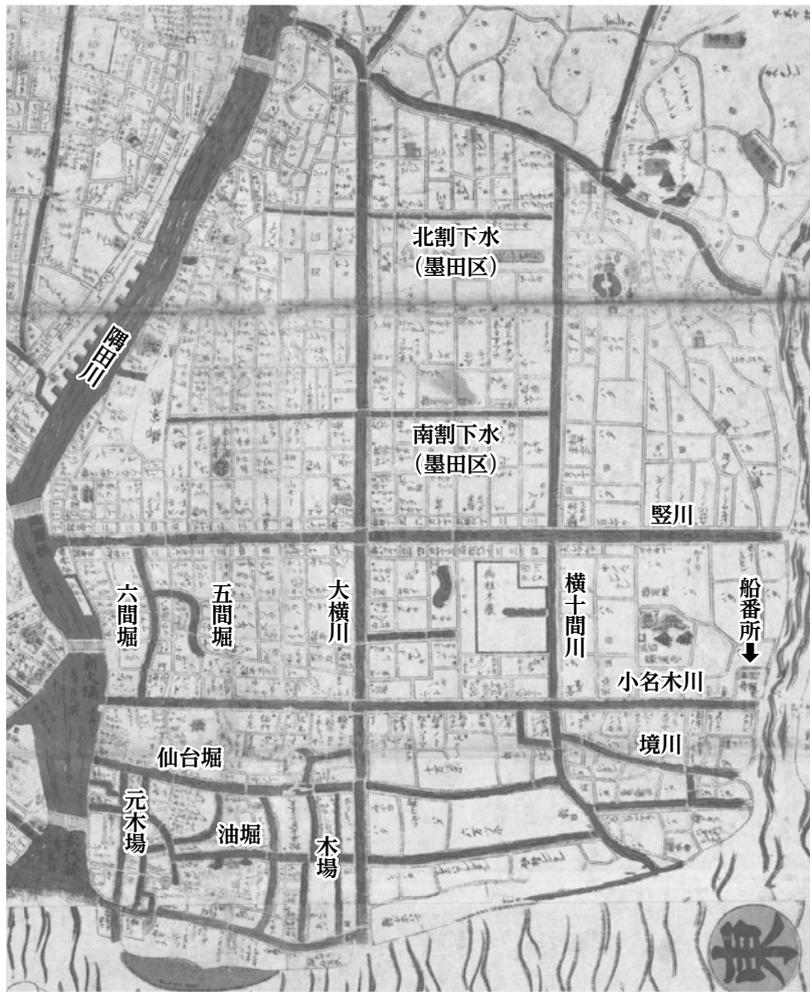


水運の歴史を 考える

—河川・堀割と船番所設置—



天保9年(1838) 天保改正御江戸大絵図
国立国会図書館デジタルコレクション

下町 文化



KOTO City in TOKYO
スポーツと人情が熱いまち 江東区

NO.
298
2022.7.8

発行
江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL.(03)3647-9819
<https://www.city.koto.lg.jp/>

- 水運の歴史を考える
—河川・堀割と船番所設置—
- 中川船番所の成立
～「深川口」から中川口へ～
- 深川公園のはじまり
- 資料紹介
『深川区報』にみえる
深川区教育会設置の水泳場
- 地域の記憶⑥
香取神社の玉垣
- 江戸の随筆拾い読み
文化四年 永代橋落ちる (二)
- 江戸の町内探訪⑦
富吉町

水彩都市江東区

江東区には、江戸時代以降、多くの河川・堀割が開削されました。徳川家康の入国後に開削されたと伝えられる小名木川はその初めで、本区の中央を東西に走り、北関東・東北から江戸に物資を運ぶ輸送路として重要な役割を果たしました。そのため、幕府はこの河川沿いに、人や積荷の改めを行う番所を設けました(次頁参照)。

一方、隅田川沿いの小名木川以南には、何本もの堀割が存在します。これらの堀割は、寛永18年(1641)に設けられた木置場の名残りで、江戸時代前期には、江戸へ木材を供給する貯木場として大切な役割を担いました。その後、元禄14年(1701)に新たな木場(木場4付近)が設けられると、堀割の多くが埋め立てられ、元木場と呼ばれました。また、万治2年(1659)には、幕府により縦川、大横川、横十間川が開削され、北十間川もこの頃の開削と考えられています。

これらの河川・堀割は、水彩都市江東区を象徴する存在といえ、江戸時代に本区域の埋め立てが進行する過程で成立しました。その意味で、本区の歴史を形作る存在でもあるのです。

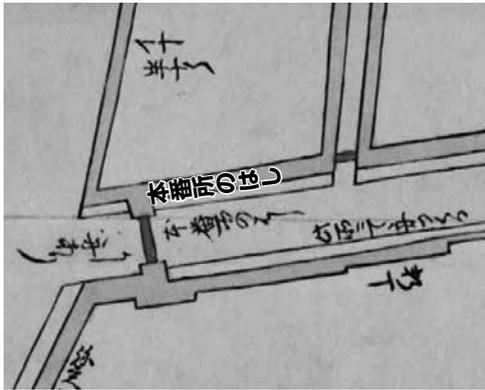
(文化財主任専門員 出口宏幸)

中川船番所の成立

「深川口」から中川口へ

小名木川は、徳川家康が江戸に入ると、時を経ずして行徳（現千葉県市川市）の塩浜へ船路を掘通したこと（「御府内備考」）。また、同書によれば、沿岸の町である海辺大工町（現清澄3、小名木川沿い）は、元和末から寛永初年（1620年代頃）の開削の際、奥川（北関東）からの船着の湊町に取り立ててほしいと、代官の伊奈半左衛門に願い上げ認められました。

このように、小名木川は江戸時代の初期以来、北関東・東北、あるいは江戸近郊の地域から江戸に通じる河川として、重要な役割を果たしました。そのため、小名木川の「深川口」（現常



新板江戸外絵図(部分)
国立国会図書館デジタルコレクション

盤1、小名木川西端付近)に番所が設けられました。

船番所の設置と移転

番所の設置年代は、正保4年（1647）とされ、この時に4名の深川番所の改役が任命されました（『江東区史』上巻）。そのため、明暦3年（1657）の大火直後の作成とされる「江戸大絵図明暦」（三井文庫蔵）には番所が描かれています。しかし、寛文11年（1671）4月「新板江戸外絵図」には、「本番所のはし」が架橋され、番所も描かれていないことから、すでに番所は存在しませんでした。

その点について、寛文元年（1661）の『柳営日次記』（国立国会図書館蔵）に、次のような記述があります。

一唯今迄有り来り深川口人改の御番所、今度本所新堀出来に付、中川口へ御番所引き移り候間、かの所において、最前のごとく御番所相勤むべきの旨、先番の面々、水野図書、高木勘左衛門、山口勘兵衛へこれを相伝えらる

内容は、これまでであった深川口の人改番所は、このたび本所に新たな堀が開削されたため、小名木川東端の中川口へ引き移ることになった。については、移転先でもこれまで通り勤めるよう、先の番所勤めの面々（前任者）が水野、

高木、山口の3名に伝えた、というものです。史料には「人改」とありますが、船の積み荷も含めた改めであったことは、想像に難くありません。

また、史料にある「新堀」とは、番所移転2年前の万治2年（1659）に開削された、堅川・大横川・横十間川を指すと考えられます。開削後、中川口から小名木川に入る船は、横十間川や大横川から堅川に入ること、深川口の番所を通らずに江戸に向うことが可能になりました。そこで、深川口にあった番所は中川口に移転したと考えられます。その年代は、本史料刊行の寛文元年ということになります。

新堀開削の背景

新堀開削と同じ万治2年、現在の墨田区内に南北2本の割下水が開削されました。割下水とは、往來を割るよう中央を流れる水路のことで、その目的は、隅田川左岸の自然堤防を排水し、宅地化することにあります（鈴木理生『江戸・東京の川と水辺の事典』）。

割下水の水は、隅田川近くから東へ流れ、大横川と交差したのち、横十間川と合流し流れ込んだことになりました（18世紀中期以降の絵図には、北割下水の大横川以東が確認できないものあり）。割下水開削から60年ほど経たず保2年（1717）の「分間江戸大絵



分間江戸大絵図(部分) 国立国会図書館デジタルコレクション

図」を見ると、当該地域は宅地化され、小規模な区画で多くの武家屋敷が設けられています。

このように、新堀開削の背景の一つに排水問題がありました。新堀開削の結果、両岸には町人地や武家屋敷が設けられ、江東区域の舟運の発達を促したことも、また事実といえます。

仮に、徳川家康による小名木川開削を江東区域における舟運の黎明期と考えるならば、万治2年の新堀開削は、船で各所へ移動することが可能となった、新たな段階と捉えることもできます。船番所の移転は、その変化への対応を如実に示すものといえるでしょう。

（文化財主任専門員 出口宏幸）

深川公園のはじまり

来年に開園150周年を迎える深川公園は、かつてはもっと広がったところをご存じでしょうか。深川公園のはじまりの姿はどうであったのか、探ってみてみたいと思います。

日本で初の公園の一つ

明治6年(1873) 1月15日、政府は公園設置のため、景色の優れた場所や歴史的な旧跡など、これまで人が遊び歩き見物していた場所(「群衆遊観ノ場所」)を選び、すべての人が楽しめる地(「万人借楽ノ地」)とする方針のもとに、各府県に候補地を選ぶように指示を出しました。

これを受けた東京府では、同年3月25日、浅草寺、寛永寺、増上寺、富岡八幡宮、飛鳥山の5箇所を公園地に選びました。それぞれ浅草公園、上野公園、芝公園、深川公園、飛鳥山公園となります。いずれも江戸時代以来の繁華な場所でした。

深川公園の範囲

深川公園は、当初その範囲が定まっていませんでした。公園選定時には、ただ「八幡社境内」とあるのみで、範囲は曖昧だったのです。

明治10年3月15日、東京府は現地を

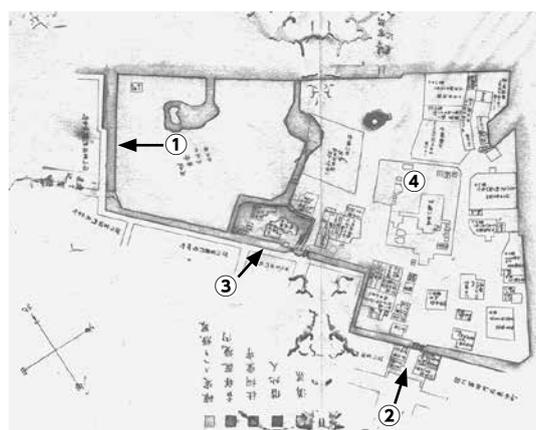


図1 深川公園地

(国立公文書館蔵「東京府史料 公園」所収図に加筆)

調査して範囲を示す図面を作成し、内務省に提出して指示を仰ぎます(「東京府史料公園」)。4月5日にその範囲が認可され、同月9日に地元へ通達されました。

図1がその図面(写)で、「確定スヘキ経界」が黄色で示されています。その範囲は、周囲をめぐる溝渠(①)の内側と表門の一面(②)です。これは、江戸時代における富岡八幡宮別当永代寺の境内地と八幡宮の社地を合わせた広義の「社地」に相当します。

範囲を決めるにあたって問題となっていたのは吉祥院境内地(③)の取り扱いです。吉祥院は、永代寺塔頭の一つで、慶応4年(1868) 3月に出された神仏判然令により、永代寺と塔頭が廃された際、墓地を管理するために

唯一残されました。なお、同院は明治29年に永代寺名を継承します。

図1を見てわかるように、吉祥院境内地は溝渠によって分けられていました。しかし東京府は、元来一つの勝地であることから、今さら分けることはできないとして、同院境内地も公園の範囲内としました。

公園選定から4年がたって、ようやく範囲が確定しました。東は現在の八幡堀遊歩道、西は門前仲町1、2丁目

公園の経営

東京府は、公園の維持管理について、園内の一部を貸地として茶店や割烹店に貸し付け、その賃料を経費に充てる方針をとります。

公園選定前、東京府知事より諮問を受けた会議所では、道路や橋の修繕も進まない中で、公園の整備は時期尚早との意見を出していました。また、本来は西洋風の美観を整えることが最上だが、日本人の風習はまだそこに至っていないので旧風のままにしておき、半分を「公園」として整備を進め、残る半分の中で営業を許した店舗から得た税金を整備費に充てるべきとしました。

深川公園では、図1を見ると八幡宮(④)がある東側に貸地が点



図2 深川公園の梅園(『新撰東京名所図会』明治30年、個人蔵)

在し、中央の溝渠を境とした西側は空白となっているので、東京府の方針通りであることがわかります。公園は東側と西側で様子がだいぶ違っていたようです。

深川「公園」の様子

「公園」として整備がすすめられた西側の場所は、現在の富岡1-14付近にあたります。かつて永代寺とその庭園があった所です。

「公園」を描いた図2を見ると、不動堂の西側に広がる梅園が見えます。また、園の中央には池があつて大小の島や奇松怪石がところどころにありました(『東京府誌』)。池の側にある富士山を模した築山の頂からは海を見渡せ、「観海ノ勝ハ独り本園ト芝公園トニ在リ」と言われました。

※深川公園のその後の変遷については『絵葉書で見る江東百景 深川公園』(文化財係刊行)をご参照ください。(文化財主任専門員 栗原修)

資料紹介 『深川区報』にみえる深川区教育会設置の水泳場

深川区教育会の活動内容については、当誌No.288の「資料紹介 深川区教育会と洪沢栄一」にてご紹介しましたが、同会の12の事業のうち、深川区内小学校児童の水泳場経営について、詳細な記述が見つかりましたので今回ご紹介します。

記事が掲載されているのは、大正5年（1916）7月10日発行の『深川区報』（第41号、図1）です。同紙は霊岸町77番地（現三好1-5）にあった深川区報社から毎月2回（10・25日）発行されました。第三種郵便物認可の日付は、大正3年12月15日とあり、この頃に創刊されたと考えられます。ちなみに、『深川区報』のちに『櫻東新聞』に名称が変更されますが、題字上部には「深川区報改題」と印字されました。

深川区教育会の水泳場に関する記事は、3面の「水泳場の開設」と4・5面間の「水泳場の始業式」に見られます。



図1 『深川区報』第41号

す。それでは、2つの記事を、順を追ってご紹介します。

「水泳場の開設」（候補地選定の経緯）

水泳場を深川区に設置する案はもとも水上警察署（京橋区明石町）の提唱によるものでした。区内に水辺が多く、児童の水難事故が想定されることから、区内の小学校に要求していました。これを受け、区教育会が大正4年9月に水泳場設置を議題とし、翌5年7月上旬の開場に至ったようです。

候補地は「一、平久町埋立地」「二、永代橋附近」「三、新安宅町河岸（新大橋々畔埋立地）」の3か所がリストアップされていました（図2）。5名の調査員と教育会幹事が研究を重ねた結果、「平久町埋立地」は区の南端にあり、往復に十数丁かかることや樹木が無く影に隠れることができないこ

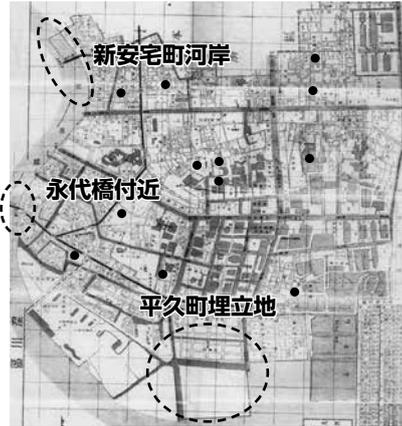


図2 深川区教育会の水泳場候補地

原図：『大東京市全図（深川区）』（チェースト社 大正9年）（部分）
（国立国会図書館デジタルコレクションより）
●：大正5年7月時点の東京市立小学校の位置

と、「永代橋附近」は往来する道路が一本しかなく交通上欠点があり、狭隘なため設備を整えることができないことが指摘されました。これに対し、「新安宅町河岸」は交通上便利で、他の候補地に比べ支障が少なかったことから選定したとのことです。ちなみに、新安宅町（現新大橋1丁目）常盤1丁目／図3の範囲）は明治38年（1905）に埋め立てられ、北は本所区との境辺りから南は小名木川河口にいたる隅田川沿いの細い土地です。

水泳場の設置は、区として初めてだったため、北隣の本所区に倣って経費を計上したようです。

「水泳場の始業式」

記事には「河底の浚渫、陸上石材の取除け等、相当日時を要し」たものの、設備が完成し、『深川区報』の発行日である7月10日に水泳場の始業式を敢行

する予定でした。ところが、当日は雨天のため、翌11日より授業を開始（予定）と見えます。運営体制は、主任教師1名、教師1名、助手8名が選考され、このほか学校側より教員4名、教育会より幹事2名が毎日出張して監督することが決定したとあります。

最後に、隅田川における水泳関連の絵葉書をご紹介します。図4は大正2年7月1日に浜町河岸（現中央区）で行われた水泳開きの模様を北から南方向に撮影したものです。深川区教育会の水泳場はこの撮影の約3年後に、新大橋の左手（東）に設置されたこととなります。

（文化財専門員 野本賢二）



図3 新安宅町の範囲

原図：『深川区 安宅町・新安宅町』（分割図を合成）
『東京市及接続郡部地籍地図』下巻（東京市区調査会、大正元年）
（東京都立中央図書館所蔵）



図4 絵葉書「浜町河岸ノ水泳開キ（大正二年七月一日）」

香取神社の玉垣



図1 玉垣

香取神社（亀戸3）の境内には、石造燈籠など多くの石造物が現存しています。この中に昭和5年（1930）に建立された玉垣（寺社の周囲にめぐらされた石で、奉納者の信仰を表すもの）があり、これらには奉納された年月、さらに奉納者の氏名と所属する町会名が刻まれています。

今回は、この玉垣から読み取れることを通じて、地域の歴史を見ていきたいと思います。

玉垣に刻まれた地名について

玉垣（図1）には、「昭和五季九月建之」と刻まれており、昭和5年（1930）9月に建造・奉納されたことが分かります。

さらに、この付近に点在する複数の玉垣には、奉納者の氏名のほか、所属町が刻まれており、「上町會」、「志茂町」、「境町境進會」の名が確認できます。

まず、玉垣に刻まれたこれらの町会

名について考えていきます。現在の町名には、上町、志茂町、境町という名称は存在しません。

そこで、文政11年（1828）に成立した『新編武蔵風土記稿』（以下『新編武蔵』）を見ていくと、亀戸村の小名（村や町を小さく区分したものと）として、「境町」、「上ノ図子」、「中ノ図子」、「割ノ図子」、「北ノ図子」等があげられています。

さらに、『江東区の民俗 城東編』（江東区教育委員会、平成13年。以下『民俗』）には、大正2年（1913）生まれの男性が語った亀戸の図子（図2）についての内容が記されており、戦前までの亀戸の地域区分が分かれます。

これによると、現在の亀戸3・4・5・8丁目が、「かみ、なか、しも、きた」の4つのズシ（図子、組）に分かれていたとしています。このうち「しも」の範囲が最も広

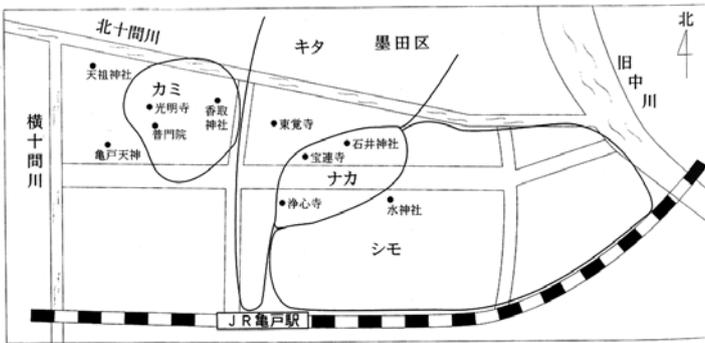


図2 「亀戸図子の範囲」（『江東区の民俗 城東編』）

毎年正月十四日にこれを興行す、この地の童子多くあつまりて菱垣造りにしたる小さき船に五彩の幣帛を建て、松竹などをも粧飾し、その中央に宝船といえる文字を染めたる幟を建てたるを荷担ひ、同音に唄ふ連れて、この辺りを持ち歩行けり、その夜童子集會して遊び戯るるを恒例とす、とあり、毎年正月に同社で行われる祭礼に宝船が童子によつて運ばれ巡行していたとされています。図3に描かれた宝船には、「寶船 亀戸村 上図子」と記されており、ここからは図子毎に船が用意されていたことが考えられます。



図3 「亀戸村道祖神祭」

（『江戸名所図会』）
国立国会図書館デジタルコレクション

丁目辺りまでを含んでいたといえます。

ところで、『民俗』では、これらの図子は香取神社の氏子のまとまりとなっていたと記されています。「亀戸 邑道祖神祭」（『江戸名所図会』。図3）

には、
毎年正月十四日にこれを興行す、この地の童子多くあつまりて菱垣造りにしたる小さき船に五彩の幣帛を建て、松竹などをも粧飾し、その中央に宝船といえる文字を染めたる幟を建てたるを荷担ひ、同音に唄ふ連れて、この辺りを持ち歩行けり、その夜童子集會して遊び戯るるを恒例とす、とあり、毎年正月に同社で行われる祭礼に宝船が童子によつて運ばれ巡行していたとされています。図3に描かれた宝船には、「寶船 亀戸村 上図子」と記されており、ここからは図子毎に船が用意されていたことが考えられます。

亀戸内の地域区分名称の変遷

前掲史資料（『新編武蔵』・『民俗』）を踏まえて、玉垣に刻まれた地名を考えてみますと、以下のようにまとめられます。

- ・「上ノ図子」↓「かみ」↓「上町」（かみまち）
- ・「中ノ図子」↓「なか」
- ・「境町」↓「境町境」
- ・「しも」↓志茂町（志茂）は「下」の当て字と考えられる。

なお、玉垣には刻まれていない「北ノ図子」と「割ノ図子」については、前者は「きた」と比定されます。後者については、『新編武蔵』にはその名称が記されていますが、『民俗』ではあげられていません。また、『新編武蔵』に記された「割ノ図子」が、現在のどの区域を示すかは史料の制約から明らかではありません。

以上、見てきた通り、香取神社の玉垣に刻まれた地名には、現在では存在しない亀戸の小名や町会名が刻まれています。このように身近にある玉垣に注目することで、地域の歴史を探ることができます。

（文化財専門員 大関直人）

文化四年 永代橋落ちる(二)

文化4年(1807)8月、富岡八幡宮の祭祀において永代橋が崩落した事件について、前回(295号)は江戸後期の考証随筆から当時の橋の状態や崩落につながる要因と思われる記載を拾ってみました。今回は崩落の様子を見ていきます。

まずは、前回でも登場したこの随筆から。

豊島屋十右衛門著「夢の浮橋附録」より

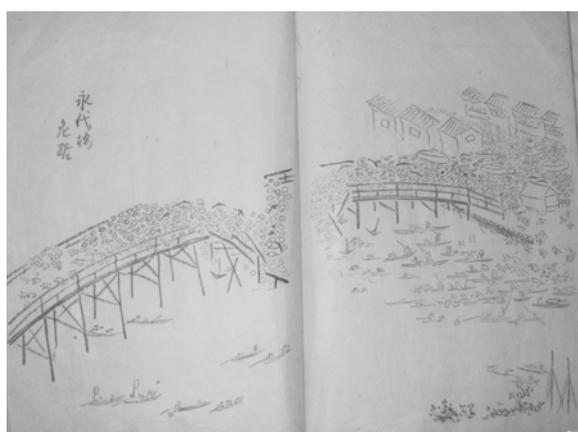
人々千石どうしへ米の落入かごとく、あまたの群集左右よりおちかさなり、しばしは、くがぢの如く、人のうへに人かさなりて、水に落入さま、見るもいたましく、其声耳もつぶる、計也、岸に有つる舟は、皆漕出て引あげ引上げ、又板子をなげ出しなげ出し、是に取つき流る、を引上げ、助るもあり、

前回も触れましたが、著者は大田南畝と交流があり、この惨事の記録を南畝に見せたところ、南畝はこれを「夢の浮橋附録」と名付けて「南畝文庫」に加えました。

この日、知人とともに祭りの見物に出かけた十右衛門は、川船に乗り船中より橋上の山車や人々の往来を眺めていましたが、やがて「めりめり」と音

が聞こえ、大きな橋げたが撓み、窪んで、九尺ほどの板が破れ、その穴より人々が重なり落ちていく光景を目の当たりにしました。それはまるで千石どおしに米が落入るようで、人々が左右から折り重なり、陸路を行くかのよう

に水面まで連なり消えていく様子は痛ましく、その声には耳もつぶれる思い



「夢の浮橋附録」(写本)

がしたと挿絵を添えて記しています。岸にあつた船はみな漕ぎ出て船底の板子を投げ出して救助に奔走し、十右衛門の乗った小舟も竿を伸ばして二人ほど助けました。

また、山東京山は永代橋崩落の一報を聞いて駆けつけ、川岸から見た救助の状況を前回も引用した「蛛の糸巻」に記しています。

山東京山著「蛛の糸巻」より

官命にて諸方の船集り、小き碇に芋縄を付たるを投げいれ、死骸を船に拾ひ、東の岸なる空地に積む、(割注)御船手組やしきのまへなり町与力、同心こ、にありて指揮す、はじめ老若男女一ツ所に積みおきけるが、死骸をもらひに来る者、見わくるにたよりあしとて、綿服、絹服、老若、男女、年の程までも一類に分けおきけるゆゑ、夜に入りても見わけやすかりしとぞ、是にて溺死の多かりしをしるべし、

官命により集められた船は、小さな碇を付けた芋縄(麻などでできた縄)を投げ入れて川に落ちた人を掬い上げ、東岸の御船手組屋敷(現佐賀一丁目あたり)の前に設けた仮の遺体安置所に運びました。町与力、同心の指揮によりはじめは一所にまとめて安置されていましたが、遺体を引き取りに

来た人々が見分けやすいよう、また夜になつても分かりやすいように男女の別、年齢や着用の衣類が綿か絹かなどに分けて安置されました。

さらに日を追い、崩落に関わるさまざまな記録や情報をまとめた随筆が執筆されますが、その中でも豊かな情報量をもつのはやはり前回も登場した大田南畝の「夢の浮橋」です。これは南畝が、交流のある文人たちから80余りにおよぶ情報を集めて一冊にまとめたものです。

橋の手前で財布を掏り取られたため祭り見物を諦めて家に帰った人物。橋の中央にさしかかったところで背におぶった子供が急に泣いてのけぞるので先へ進めず、やむを得ず引き返した祖父と孫。橋上で落ちることを予測して、落下の前に衣の裾をからげると準備をしたため救われた武士。娘の亡骸を間違えて引き取り、翌朝気づいて改めて娘の亡骸と対面し、悲しみを二度味わうことになった家族の話など、崩落に巻き込まれて犠牲となった人々の遺族の歎き、逆に九死に一生を得た人物の話、自分は助かっても他の人々を救えなかったことへの後悔など、ここには恐ろしさ、痛ましさ、詰り込められています。崩落の翌日には町名を記した幟を立て、地引網をひく船が40艘ほど見えたこと、東岸の提灯を立てたとこ

ろに「はや桶」(間に合わせに作った粗末な棺桶)がたくさん並んでいるのが見えたことも記されています。

最後は、曲亭馬琴の随筆から妻と4人の子を祭り見物に送り出した人物の話です。

曲亭馬琴編「兎園小説余録」より

朝とく出づべし、いぬる頃、永代橋を渡りつる折見たるに、彼橋の欄干の朽たる処あり、安永の末にか有けん、中洲の涼みのさかりなりし日、ある夜、仙台侯の花火を立らる、とて、常にいやましの人群集せし時に、いと多かる茶店に入居あまりて、大橋に聚合(ツド)ふ人、いくらといふ数も知らざりければ、終に橋の欄干を推倒して、入水せし老若多かりき、これを思ふに、翌も亦、永代橋をわたる人多からんには、欄干を推倒すまじきものにもあらず、縦彼橋に臨むとも、人群集せしば、引返して、大橋を渡りゆくべし、

「兎園小説余録」は、馬琴が主催する兎園会にて文人たちから収集した話を集めたもので、この一説が誰の話なのかは不詳です。

この人物は祭りの前夜、妻に向かつて朝早く出掛け、永代橋のたもとについて橋の上が混雑していた場合は引

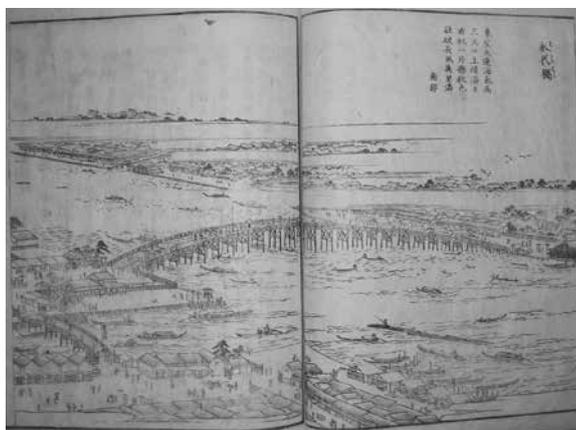
返して新大橋を渡るように言い聞かせました。以前、永代橋の欄干が朽ちているのを見かけており、かつて新大橋の欄干を押し倒したくさんの人が川に落ちたことを思い出して、永代橋において同様なことが起こることを危惧したからです。この予感は見事に的中し、近隣の人々は妻子を心配して訪ねてきますが、本人はかねてより思うところがあつて今朝早く出したので、女子供であつても五つ時(午前8時ごろ)前後には永代橋を渡っているはずなので按ずることはない、と悠然としていました。祭りの終わるころを見定めて未

の下刻(午後2時ごろ)に使いのものを迎えに行かせ、戌の刻半頃(午後8時ごろ)に妻子は無事に帰宅します。妻が言うには、帰路は木場から冬木町へ廻り海辺橋、高橋を渡り両国橋へと出たそうですが、高橋を渡るころには群集で込み合い、橋がゆらめくほどで、この橋も落ちるといふ人もいて生きた心地もしなかつたそうです。それでもこの人物はかつて新大橋の欄干が崩れたことを思い出して、妻子を早朝に出立させたことは「われながらよくも量りつるかな」と機転をきかせた自身自身を誉めています。

馬琴は海辺橋の東にあつた旗本松平家の邸内(現平野)で生まれ、10歳

で家督を継ぐと、主君松平信成の孫八十五郎に仕えました。前掲の文中には、八幡宮を産土とし、かつ30年以上前、子供であつた頃に主君に従つて祭りを見物した記憶があることが記され、また妻に連れられて祭り見物に出かけた4人の子供たちの年齢が馬琴の子供たちの年齢と似かよっていることなど、この一説には馬琴の生涯と通じる点が見られます。

永代橋は崩落した後、一時は船渡しで往来をしていましたが、文化5年(1808)11月にかけて替えが完了し、28日に老夫婦による渡り初めが行われました。その後も破損と修復、改架をくり返していきませんが、「東都第一の長橋」と称えられたこの橋は、錦絵や



「江戸名所図会」

江戸の名所案内記の中で虹型の美しい姿を披露しています。

* * * * *

さて、ここからは余談です。「兎園小説余録」の新大橋の惨事は他の随筆にも取り上げられています。江戸の出来事を編年でまとめた『続談海』によれば、事件が起きたのは安永8年(1779)8月3日、仙台堀の大川口にある仙台河岸屋敷で花火が打ち上げられ、これを見物しようと江戸中から人が集まり、新大橋の下流あたりの浅瀬を築立てて造成した中洲には棧敷が設けられ、陸上から、または川面から人々が花火に興じていました。そして見物人でにぎわう新大橋では、その重みで欄干が押し倒されて怪我人、死人が多く出たとあります。もう一点『飛鳥川』という随筆では、万年橋の欄干が損傷して怪我人が出たと記されています。本書の著者は不詳ですが文化7年(1810)の撰であることがわかっており、この件を「三十年計りも以前」と記していることから安永8年の花火のことと思われる。さて、安永8年に欄干が落ちたのは新大橋でしょうか、万年橋でしょうか。疑問は残りますが、これもまた興味深い出来事であつたようです。

(前文化財主任専門員 向山伸子)

富吉町

とみよしちょう

今回は、深川南西部（現永代1・佐賀1）に位置した富吉町を取り上げます。この町は、8ヶ町からなる深川（深川師町の1町で、寛永6年（1629）に成立したと伝えられています（本誌275号〜277号参照）。文政11年（1828）に町が書き上げ、幕府が編纂した『町方書上』（以下『書上』）を中心に富吉町を見ることにします。

富吉町の概要

同書によれば、町の開発者は助十郎という人物でした。開発後は、町名主



嘉永5年(1852) 本所深川絵図(上) 部分(下)



れ、呼び名はありませんでした。そこに架けられ、富吉町と中島町をつないだ福嶋橋は、元禄16年（1703）

を勤め、町名も当初は開発者の名前をとって助十郎町と呼ばれました。その後、元禄8年（1695）に幕府が検地（土地の調査）を実施すると、富吉町に改めました。ただし、なぜ「富吉町」と唱えたかは分かりません。

『書上』によれば、文政当時の富吉町には、家持1人、家守（長屋の大家）18人、地借（借地）8人、店借159人が住んでいました。幕末に作成された「本所深川絵図」を見ると、町は往来を挟んで南北に分かれ、その範囲も比較的狭いように見えます。東側には、町に接して堀割が確認できます。

堀割・福嶋橋

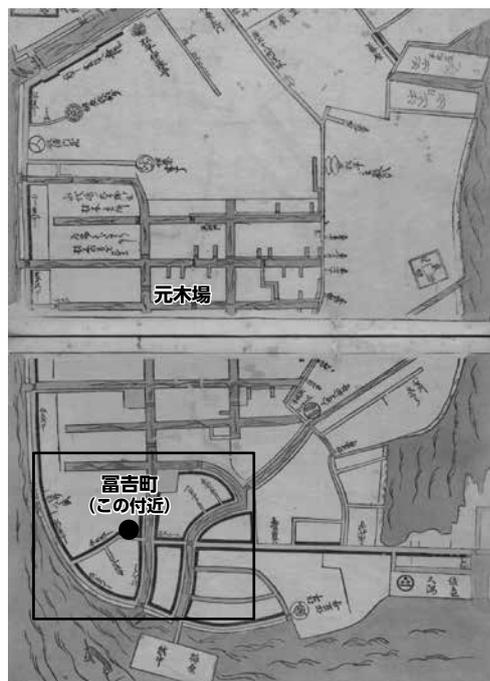
富吉町の東側を流れる堀割（現大島川西支川）を挟んで中島町がありました。同町の書上げには、堀割は8間幅（14.4m程）で、「北の方、油堀よりの枝川にて名目これなし」と記さ

に幕府管理の御入用橋になりました。

この橋について、津山藩の『江戸日記』（岡山県津山市津山郷土博物館蔵）には、文化3年（1806）8月28日、当時大納言（將軍継嗣）で、のちの12代將軍徳川家慶が、深川八幡宮（富岡八幡宮）と永代寺（明治初期に廃寺）を訪れた際、福嶋橋を渡った記述があります。この時、大納言は、江戸城から永代橋に向かい、同橋際（現中央区側）で乗船し、同橋際（現江東区側）で下船し、福嶋橋を渡りました。そして、永代寺で食事をとり、深川八幡宮を上覧した後、江戸城に帰城しました（本誌291号参照）。

深川師町

福嶋橋が架かる堀割のほか、この付近にはいくつかの堀割が確認できます。これらの堀割は、江戸時代の早い頃から存在した可能性があり、その意味で開発当初からの師町の景観を形成していたともいえそうです。富吉町の周辺に位置する相川町、熊井町、諸町、大島町、黒江町などは、すべて深



延宝8年(1680)江戸方角安見図
国立国会図書館デジタルコレクションより

川師町に属する町で（他は清住町と佐賀町）、江戸前の海で貝簾などの漁業生産に従事したと考えられます。このことから、師町の富吉町に住む人々、特に店借人の中には、船での手強い労働力を必要とした貝剥きなどの仕事に従事し、生業とした人もいたであろうことは、想像に難くありません。

（文化財主任専門員 出口宏幸）

お詫びと訂正

前号(No.297)に誤記がありました。
 1頁 登録文化財の総数
 誤…1059件 正…1058件
 4頁2段11行目
 誤…實田萬吉 正…寶田萬吉
 8頁1段4行目
 誤…3ヶ町が成立したのは
 正…商売屋が認められたのは
 以上、お詫びして訂正いたします。